

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三〒六〇四 八〇一三
京都市中京区蛸薬師通河原町東入
電話 (〇七五) 二五三・〇七〇七

『揺れる情(こころ)』通信⑮

稲荷山武田病院院長 土屋宜之／京都医療センター緩和ケア創設者
本居宜長さんはこう言っています。「即ち、事物の知覚の働きの何を知覚したかで停止せず、『みるにもあかず、聞くにもあまる』といふ風に進展する。事物の知覚が対象との縁を切らず、そのまま想像のうちに育っていくのを、事物の事実判断には、阻む力はない」と。

宜長さんが「よろずの事に触れて、感く(うごく)ひとの情(こころ)」と言う時に考えられていたのは情(こころ)の感(うごく)の、そういう自然な過程でありました。敢えて言ってみれば、素朴な認識力としての想像の力であつたのです。

患者様のKさんは「弘前城のお堀を流れる花筏と一緒に、わたしの哀しみも流れていきました」と嬉しそうに言われました。

《今年の顔見世》

水口 一夫

今年には松竹株式会社創立130周年を記念しての公演である。今年の顔見世は重量感はないが、見やすい演目が並んだ。昼の部の序幕では、オペラを歌舞伎化した「蝶々夫人」が、新作歌舞伎として上演される。関西人気俳優の愛之助は「大津絵道成寺」で、五役早替わりの舞踊を見せる。他に中車、扇雀で夫婦の情愛を描く森嶋外の「じいさんばあさん」、「三人吉三」

夜の部の第一の見ものは「元禄忠臣蔵―仙石屋敷―」である。吉良邸に討ち入ったあと、仙石家に預けられた大石内蔵助は、大目付の仙石に自分の心情を訴える。仁左衛門と梅玉、二人の人間国宝の芸のぶつかりあいは、一見に値する。今年、歌舞伎座で、時蔵から萬寿と改名したお目見得の演目は「かさね」清元の名曲舞踊である。愛之助と踊る。「御所の五郎蔵」は、隼人、竜太郎の花形で、追出しは舞踊で鴈治郎の「越後獅子」上方歌舞伎の演目がないのが寂しいが、舞踊に、新歌舞伎、若手活躍の顔見世の幕が開く。

《本の楽しみ》

常楽臺住職 今小路覚真

京都の街中を歩いて、この十年ばかり寂しさが募るばかりです。

その理由の最たることは、本屋さんが姿を消していることです。

かつては河原町通りの四条より北には、独特な雰囲気を出していた本屋が数軒ありました。

そうした本屋さん巡りが、街歩き楽しみでした。本屋さんでの一番の楽しみは、ずらりと並んでいる

背表紙の言葉を眺めることです。

漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字、言葉の洪水です。何百冊、何千冊と並んだ言葉が、時に騒がしく、時に落ち着きはらって投げ掛けられます。

背表紙を眺めているだけで時を忘れることは簡単です。そして、そこで意図しない出会いがあります。

密かに胸躍らせて、その出会いが周りの人に気付かれないように、一冊を手にしてカウンターに向います。こうしていつになつたら頁が開かれるか、分からないままの一冊が、わたしの書架に静かに納まっています。

《イタリア料理と香辛料》

イタシヨク 福村直

イタリアは160年前まで多くの独立国家を形成していたため、料理にも地方色が豊かに残されています。イタリアの南部と北部では、香辛料の扱いが随分と異なり、スパイス類は南部が乾燥させたもの、北部はハーブが多く、これは気候風土との関係もあり、降水量が少なく暑い南部ではハーブが育ちにくいという事情があり、気候条件の良い北部では海からの潮風にあたり風味の一味違う香り高い美味しいハーブが育ちます。イタリアで頻繁に使われる香辛料はサルヴィア、ローズマリー、バジル、イタリアンパセリ、マッシュルームなどで、南部ではニンニクと唐辛子を多用します。ピザやパスタ、肉と魚料理と幅広く活躍します。バジルを使った料理の代表例として、ジェノヴァーゼソールが知られています。日本料理に比べイタリア料理はしっかりと味付けですが、これはお互いの香辛料の使い方による文化にも表れています。

健康レシピ

栄養士 國松美也子

《12月のレシピ》

寒さが増して来る12月。栄養豊富な旬の食材を取り入れて、免疫力を高めましょう！

【12月／冬季が旬の野菜類】

白菜、キャベツ、長ねぎ、ほうれん草、小松菜、大根、かぶ、にんじん、れんこんなど。

『小燕の生姜あん』(2人分)

材料 小燕2個、出汁パック1袋、生姜1かけ、水溶き片栗粉

①小燕は皮を剥いて、半分のカットし鍋に並べて小燕がかぶるぐらいの水を入れて出汁パックを入れて火にかけて10分ぐらい下茹でする。

②出汁パックを取り出し、①の鍋に酒大さじ1、みりん大さじ2、薄口醤油大さじ15を入れてさらに5分ぐらゐ弱火で味を付けていく。

最後にすりおろした生姜を入れて、水溶き片栗粉でとろみを付けて完成。

＊かぶの葉も栄養たっぷりなので、細かく刻みごま油で炒め、みりんと醤油で甘辛く炒めご飯のお供に。

《大原流声明雑話⑳》

實光院住職 天納玄雄

鎌倉時代には百余りの堂舎が立ち並び栄えた大原寺だが、いちど廃絶しかかっている。勝林院の古文書に引用された当時の記録によれば、禪宗の僧、祖曇が寺を占領したこと端を発する。大原の僧侶たちは寺を離れて散り散りになり、寺を機能不全に陥らせることで対抗したのだ。このためか、天台声明の伝承系図には約九十年の空白期間がある。これを復興したのは勝林院の良雄であった。系図を見ると、良雄に声明を伝授された者のなかに室町幕府三代將軍足利義満(※)で出家し道義と名乗っていたが、良雄は義満に声明を伝授し、義満は良雄を後援して大原寺の復興を後押ししたのであろうか。そしてこの二人によって大原流の声明は、より一層の名声を得ることとなるのである。